

「算数ボックス」



私の娘がこの春から小学校に入学しました。新しい帽子、新しいランドセル、初めての先生、初めての友だち。どれをとっても新鮮なようです。

「今日、先生の給食が山盛りでびっくりした。」

「となりの席の子と一緒に、お絵かきした。」

「学校の色々な部屋を探検した。」

など、毎日学校のことを話してくれます。

その娘が、ある時、こんなことを言いました。

「算数ボックスな、何で新しいのを買わなかったん？」

算数ボックスとは、おはじきや数え棒などが箱にそろっていて、算数の授業で使う学習道具です。娘には三才離れた兄がいます。兄は一年生の頃からとても丁寧に算数ボックスを使っていました。まだ十分使える様子だったので、少し補充をして、改めて買うことはしませんでした。もしかしたら、何か友だちに言われたのかなと思ひ、娘にたずねてみました。

「何かあったん？」

「みんなのと全然ちがつい。」

「そうやね。みんなのところがいい。」

「だから、なんか嫌やなあと思ってた。」

「そうか。嫌やったんやね。無理させてたんやね。」

私は常日頃から、「ものは大事に使うんだよ。」と語ってきました。娘が算数ボックスを学校に持って行く時も、「大事に使うんだよ。」と語っていたのですが、やっぱり兄の「お古」は嫌だったのだらうかと思いました。

「違う。違う。はじめはちょっと嫌やったけど、友だちが『グー』の絵がかわいい。』って言ったの。でもお兄ちゃんのお古やしあんまり……って言うし、『お古じゃなくなってお宝。』って言われた。」

「お宝？」

「そう、お宝。お兄ちゃんお姉ちゃんのお古を使うってことは、大事に使ってきたことだからお宝なんだって。友だちも『弟のために大事に使う。』って言った。」

私は「大事に使いなさい。」って言うだけで満足していました。「お宝」という言葉は、子どもにとっても魅力的な言葉だったようです。兄の使っていたものを使うという状況は変わりませんが、見方を変え、言葉を変えるだけでずいぶん印象も変わると感じました。

「その後、先生が来て、『お兄さんは大事に使っていたんやなあ。みんなも大事に使ったらずっと使えるんだよ。』って言ってくれた。あの算数ボックスはお宝なんだなあって思った。」

娘がちよっとうれしそうに言ったので、私はほっとしました。

数日後、授業参観がありました。娘は時折私の方をちらちら見ながら、あの算数ボックスを広げて、楽しそうにおはじきで数を数えていました。